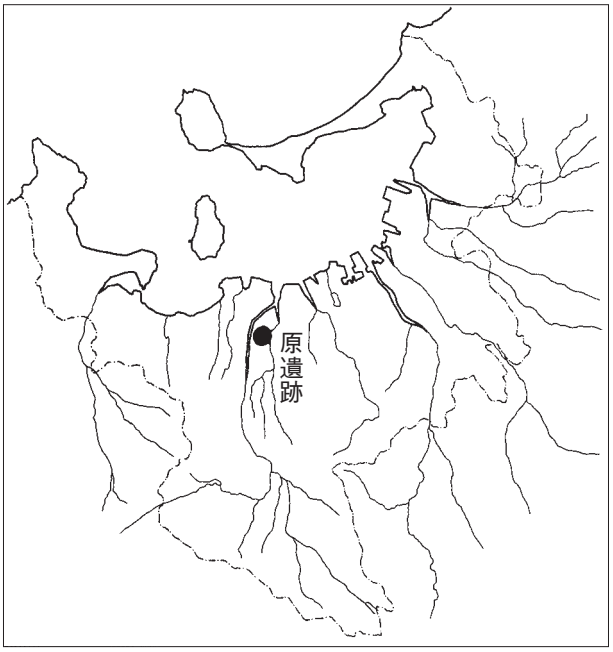
原 遺 跡 12

－原遺跡第19次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書
第917集

２００７
福岡市教育委員会



遺跡略号　ＨＡＡ－１９
調査番号　９６２６

SK016出土鏡

序

玄界灘に面し古くから大陸との文化交流の玄関口であった福岡市には、豊かな自然と歴史が残されています。その中でも早良平野は大陸との交流の中で古くから栄え、遺跡も多く存在しています。これらを保護し、未来へと伝えていくことは行政に課せられた責務であります。しかし、近年の著しい都市化による市街地の拡大により、その一部が失われつつあることもまた事実です。福岡市教育委員会は開発によってやむを得ず失われていく遺跡について、事前の発掘調査を行い記録の保存につとめています。

今回報告する原遺跡群発掘調査報告書は専用住宅建設に伴う調査成果についての記録です。この調査では中世の集落跡を調査し、祭祀土壙など貴重な遺構を確認いたしました。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また、研究資料として御活用頂ければ幸いに存じます。最後に発掘調査から報告書の刊行に至るまで、多くの方々の御理解と御協力を賜りましたことに対して心から謝意を表する次第であります。

平成19年３月30日

福岡市教育委員会

教育長　植木とみ子

例　言

□本報告書は早良区原６丁目の専用住宅建設に伴って1996年８月１日から８月16日にかけて発掘調査を行った原遺跡第19次調査の調査報告書である。

□本書に収録した発掘調査は福岡市教育委員会の屋山洋が担当した。

□遺構実測の作成と写真撮影・遺物実測は屋山が、周辺測量は原幸子・宮原邦江・柴田勝子・堀タケ子・屋山が行った。

□本書で用いた方位は磁北で真北より６°21″西偏する。

□遺構遺物番号はそれぞれ通し番号とした。

□本書に関わる図面・写真・遺物など一切の資料は福岡市立埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。

□出土した鏡に付着した布片の分析は福岡市立埋蔵文化財センターの比佐陽一郎氏、片多雅樹氏による。

□貿易陶磁の分類は大宰府条坊跡 XV －陶磁器分類編－（2000年）太宰府市教育委員会を参照した。

遺跡調査番号	9626	遺跡略号	ＨＡＡ－19	分布地図番号	82　原
調査地地番	福岡市早良区原６丁目802番地				
開発面積	250㎡	調査面積	121㎡	調査原因	専用住宅建設
調査期間	1996年８月１日～８月16日		担当者	屋山　洋	

本文目次

Ⅰはじめに……1
1　調査に至る経過……1
2　調査の組織……1
3　遺跡の立地と環境……1

Ⅱ調査の記録……4
1　調査の概要……4
2　遺構と遺物……5
（1）土坑……5
（2）井戸……9
（3）溝……12
3　小結……14
4　原19次出土和鏡の保存科学的調査（比佐陽一郎・片多雅樹）……15
Ph．1　鏡面織物付着状況
Ph．2　織物の実体顕微鏡写真（約10倍）
Ph．3　織物の実体顕微鏡写真（約40倍）
Ph．4　ビデオマイクロスコープによる糸の計測状況
Ph．5　繊維断面のクロスセクション（約50倍）
Ph．6　繊維断面のクロスセクション（約200倍）
Ph．7　紙と見られる組織の実体顕微鏡写真（約20倍）
Ph．8　赤色顔料の実体顕微鏡写真（約20倍）

挿図目次

第１図　原遺跡群の位置（1/25,000）……2
第２図　原遺跡群内発掘調査地点位置図……3
第３図　調査区周辺図（1/500）……3
第４図　調査区全体図（1/80）……4
第５図　土坑実測図（1/30）……6
第６図　土坑出土遺物実測図（1/3）……7
第７図　SK16・SK17遺構・遺物実測図（1/30・1/3）……10
第８図　SK16・SK17遺物実測図（1/3、054は1/1）……11
第９図　SE11遺構・遺物実測図（1/30・1/3）……13
第10図　SD010遺物実測図（1/3）……14

図版目次

図版１．①調査区全景（西から）　②SK001（西から）　③SK003（北から）
図版２．①SK004（東から）　②SK005（北西から）　③SK006（北から）
図版３．①SK007（西から）　②SE011（東から）　③SE011井筒（南から）
図版４．①SK016・017（南から）　②鏡出土状況（南から）　③鏡（X 線写真）

Ⅰ．はじめに

1　調査に至る経過

1996年７月11日付けで大神千秋氏から福岡市教育委員会埋蔵文化財課に福岡市早良区原６丁目802番地の専用住宅建築に伴う埋蔵文化財事前調査申請書が提出された。申請地は周知の埋蔵文化財である原遺跡群内に位置しており、周辺の調査でも遺跡が確認されているため申請地においても遺構の広がりが予想された為、試掘調査による確認が必要であると判断した。その後、重機を使用した試掘調査で現地表面から52㎝の深さで遺構を確認した。その結果と建物の基礎設計を照らし合わせたところ、計画されている建物基礎では遺構の破壊が避けられないため、建築に先立ち発掘調査を行い記録保存を図ることで両者の協議が成立した。以上の協議をうけて1996年８月に発掘調査を行うこととなり、実際には８月１日より８月16日までの期間で調査を行った。試掘の結果などから建物建設予定地の西側部分は深さ１ｍ程の近現代の溝が埋没していることが判明したため、溝部分は調査対象からはずし、２本のトレンチにより深さの確認をして終了した。

2　調査の組織（1996年当時）

調査主体　教育委員会埋蔵文化財課
　　埋蔵文化財課課長　荒巻輝勝
　　埋蔵文化財課第１係長　横山邦継
調査庶務　埋蔵文化財課第１係　内野保基
調査担当　埋蔵文化財課第１係　屋山　洋
作業員　　坂口雄彦　坂口和子　坂口加代子　柴田勝子　柴田春代　土斐崎初栄　原幸子
　　平井和子　堀タケ子　宮原邦江
整理作業　神谷玲子　黨早津紀　濱野年代　山口初子

3　遺跡の立地と環境

原遺跡群は早良平野の北側、室見川中流右岸の低位段丘上に位置する。標高は６～７ｍ前後を測る。台地は東側に油山川、西側に金屑川が流れ、北側には近世まで低湿地が広がっていたと考えられている。金屑川を挟んで西側には弥生時代の環濠集落や７世紀前後の早良郡衙が想定されている有田遺跡があり、遺跡の東側には原東遺跡や飯倉遺跡が存在する。

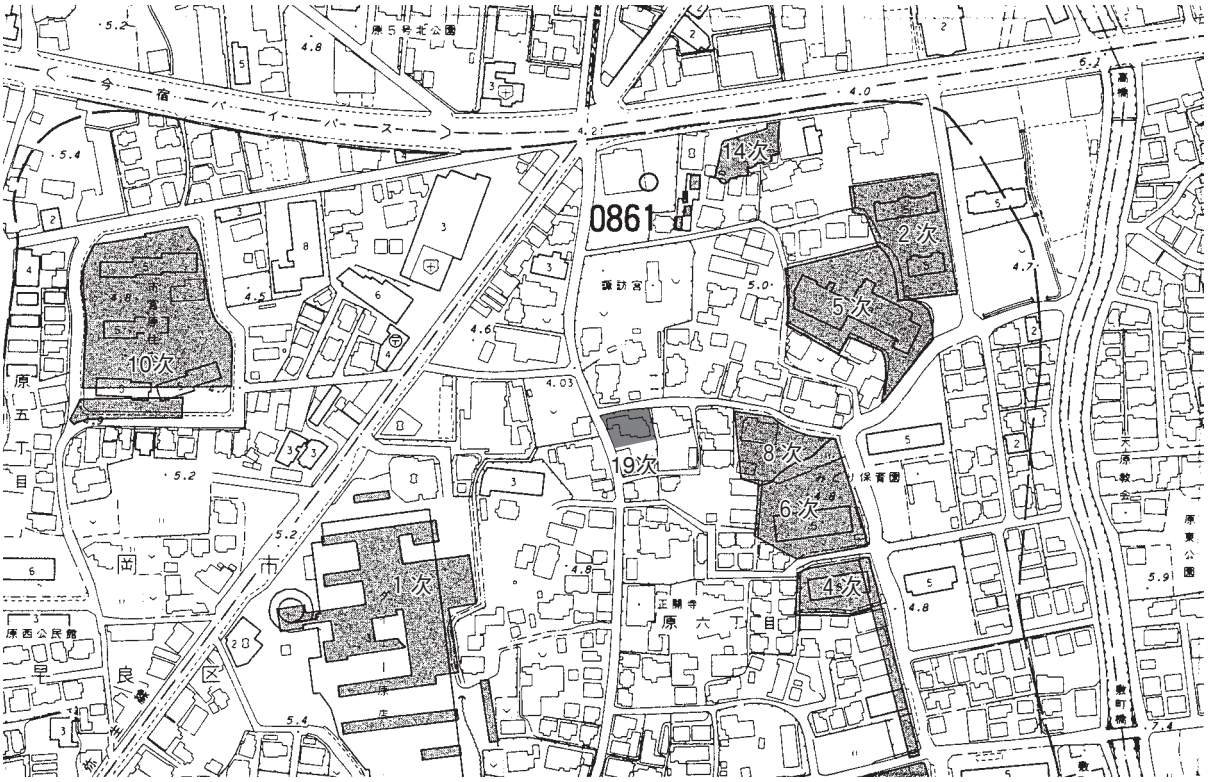
原遺跡はこれまで22次にわたる発掘調査が行われており、その結果縄文時代から中近世までの遺物や遺構が確認されている。縄文時代は明確な遺構は確認されておらず２次や９次・12次・17次・22次調査などで石鏃が出土したのみである。古い遺構としては１次調査で弥生時代前期初頭の夜臼土器を伴う竪杵が出土している。その後の弥生時代前期後半から古墳時代前期の遺構は中近世においてかなり破壊されたと思われ、遺構の残りは良くないもののこの時期の土器は後世の遺構から多く出土する。

中世は12世紀後半の輸入陶磁器や15～16世紀の遺物が多く見られる。特に15～16世紀にかけては溝や掘立柱建物が確認されており、台地西側に名主層の館跡が存在したと考えられている。

今回の19次調査地点は原遺跡群の北端部に位置しており、現在は諏訪宮の南側に位置する。近隣では４次・６次・８次調査等が行われている。特に６次調査と８次調査では平安時代～鎌倉時代にかけての掘立柱建物や井戸・溝・土壙墓が確認されており、古代末～中世にかけて台地北側に集落が存在したことが判明してきた。また周囲では弥生時代から古墳時代にかけての遺構も多く分布しており、それらの遺構が本調査区まで広がると予想された。

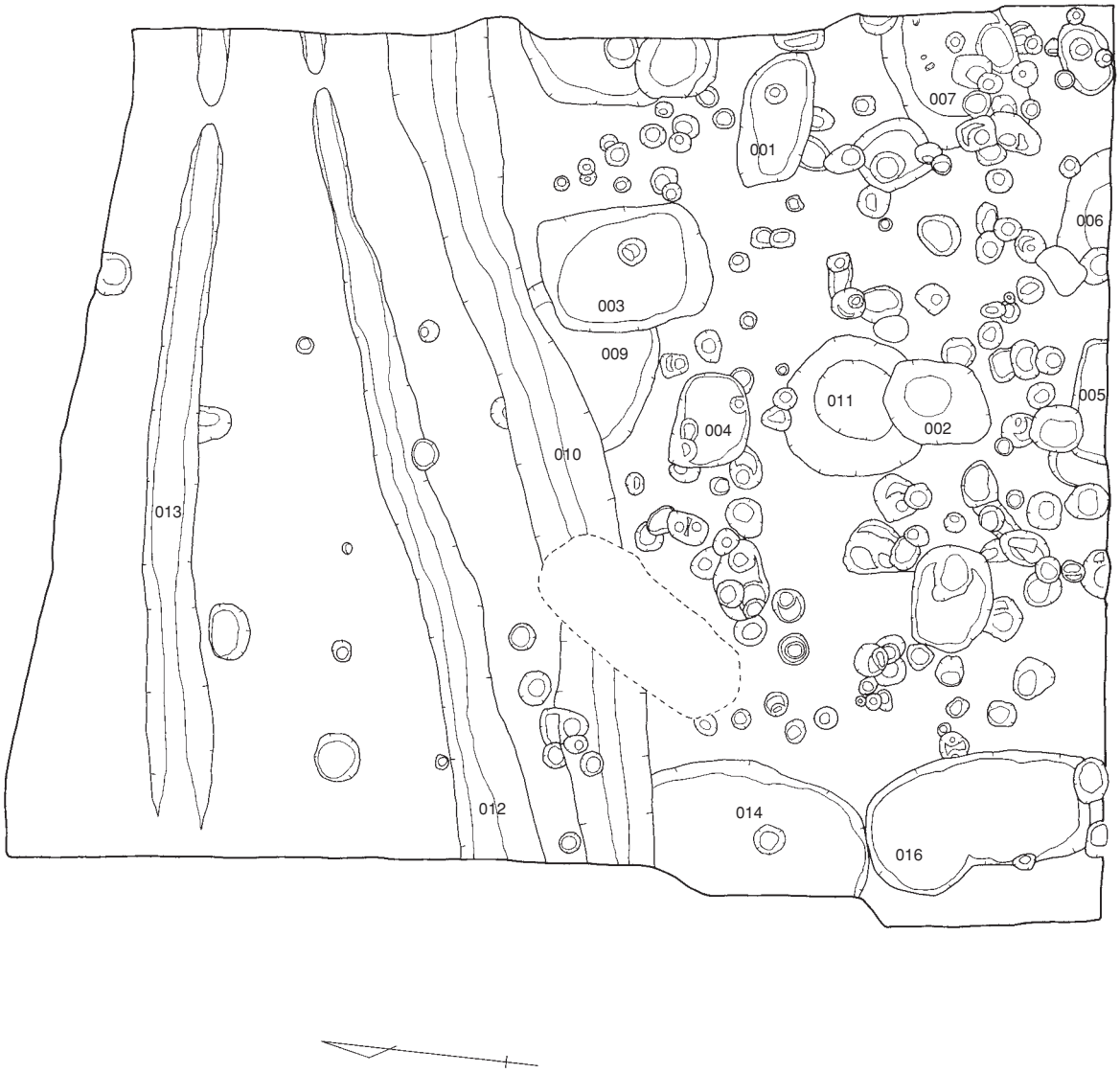
1．藤崎遺跡群　2．西新町遺跡　3．有田遺跡群　**4．原遺跡群**　5．原東遺跡群
6．飯倉遺跡群　7．次郎丸高石遺跡　8．免遺跡群　9．田村遺跡群　10．野芥大薮遺跡
11．野芥遺跡群　12．飯倉H遺跡　13．クエゾノ遺跡

第１図　原遺跡群の位置（1/25,000）



第２図　原遺跡群内発掘調査地点位置図

第３図　調査区周辺図（1/500）



第４図　調査区全体図（1/80）

Ⅱ．調査の記録

１　調査の概要

本調査は専用住宅建設に伴う調査である。建物基礎部分の面積は250㎡にわたる。基礎部の西側半分は埋土にビニール等を含む近現代に埋没した深さ1.5m の溝で、試掘で遺構が遺存していないことが判明したため、その部分をのぞいた東側121㎡の調査を行った。調査は表土から深さ52㎝の盛土と耕作土を除去した黄褐色粘質土上面で行った。検出した遺構のうち井戸、土坑、溝はいずれも古代末～中世で、東側50m に位置する８次調査などで確認された弥生時代の甕棺墓や古墳時代に伴うと考えられる遺構は確認できなかった。遺物は若干弥生土器の破片が出土しているものの、ほとんどは古代末から中世にかけての貿易陶磁や土師椀、瓦器椀、土師皿等である。調査区の南西隅で検出したSK016からは多数の土師皿とともに和鏡が１枚出土した。

2　遺構と遺物　今回図示した土師皿・坏はすべて回転糸切りである。

（1）土坑　10基検出した。

SK001（第５図）調査区の東側に位置し、中央をピットに切られる。平面形は東西に長い楕円形で東西151㎝、南北79㎝、深さ26㎝を測る。断面は浅皿状である。埋土は上層が黒褐色土。下層は暗茶褐色土を主とし、細かな黄色粘土を薄い層状に含むため自然堆積と思われる。時期は12世紀中頃から後半か。出土遺物（第６図001～006）。001は龍泉窯系青磁碗Ⅰ類である。高台径6.2㎝を測る。胎土は灰白色で空洞が多い。調整は丁寧なヘラ削りである。釉は厚く透明で細かな気泡を含み明オリーブ灰色を呈す。畳付、見込みの一部まで釉がかかり、見込み中央に支柱の痕跡がみられる。002は白磁皿Ⅲ類で復元口径8.3㎝を測る。胎土は灰色で釉は薄く灰オリーブ色を呈す。003は白磁碗Ⅴ類で胎土は白色、釉は透明である。004は褐釉の耳壺か。胎土は須恵質で灰色を呈す。胎土中央部が砂を含むのに対し、内外表面の厚さ1.5～３㎜は緻密で砂も含まない。被熱のため釉が残らない。005は施釉瓶である。復元底径5.2㎝を測る。胎土は須恵質で赤紫色を呈し緻密で砂を含まない。釉は熱のため発泡している。006は土師皿で口径9.4㎝、器高1.3㎝を測る。淡橙色を呈し、胎土に微小な砂と雲母片を多量に含む。底部に板状圧痕あり。

SK002（第５図）調査区の南側で検出した。SE011を切る。平面はいびつな方形で長径112㎝、深さ33㎝を測る。断面は逆台形を呈す。埋土は黒褐色土を主とし黄色粘土のブロックを全体的に含む。時期は近世から近代である。出土遺物（第６図）。007は白磁碗片で小さな玉縁がつく。釉は透明。

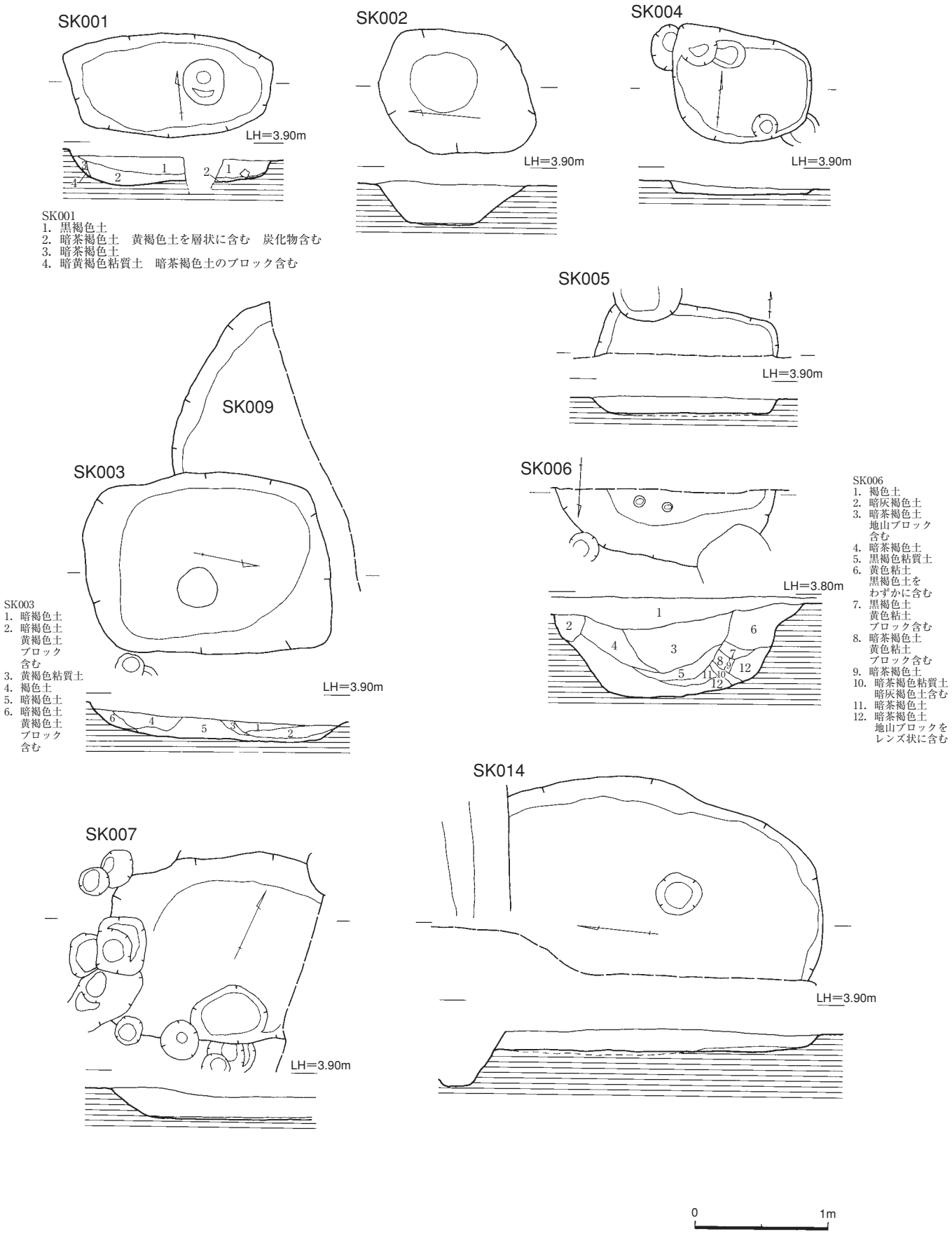
SK003（第５図）調査区の中央に位置しSK009を切る。平面形は南北にやや長い隅丸方形を呈し、長径195㎝、短径141㎝、深さ14㎝を測る。断面は浅皿状を呈す。埋土は暗褐色土を主とし、黄色粘土ブロックを含む。覆土中から白磁碗片・青磁小片や土師皿小片が出土した。12世紀前後か。

SK004（第５図）調査区の中央で検出した。平面形は隅丸の長方形を呈し、長径101㎝、短径89㎝、深さ５㎝を測る。断面は浅皿状を呈す。覆土は褐色でやや粘性を帯びる。埋土中から土師皿片１点と近世陶磁器片が１点出土した。時期は近世から近代か。

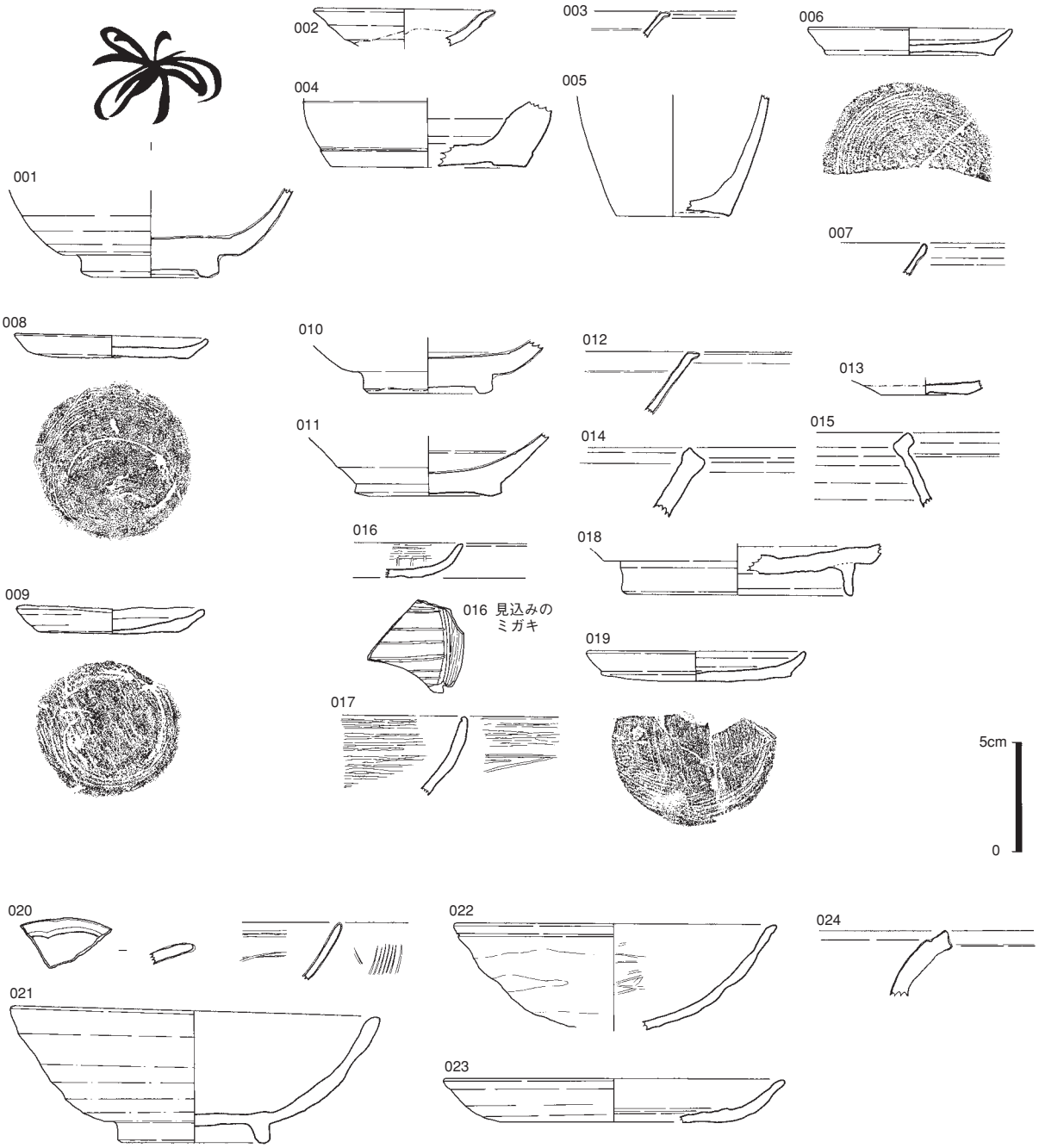
SK005（第５図）調査区の南端に位置する。南側が調査区外に延びるため全容は不明であるが、現状で長径141㎝、深さ18㎝を測る。断面は浅皿状を呈す。埋土は単層で灰褐色を呈し、黄色粘土のブロックを全体的に大量に含む。しまり強い。出土遺物はなし。時期は近世か。

SK006（第５図）調査区の南端に位置する。南側が調査区外にのびる。現状で東西に長い楕円形を呈し、長径164㎝、深さ61㎝を測る。断面は逆台形を呈す。埋土は暗茶褐色土で、粘性の黒褐色土をレンズ状に含む。時期は12世紀後半か。出土遺物（第６図008・009）土師皿が２枚出土した。008は口径8.8㎝、器高1.2㎝を測る。赤橙色を呈し外面に黒斑あり。微小な砂と雲母片を含む。内底部に静止ナデを施す。009は口径8.65㎝、器高1.15㎝を測る。淡橙色を呈す。微小な砂と雲母片を含む。調整は内底部に静止ナデを施し、底部は板状圧痕の上からナデ。整形は雑で平面形はやや楕円を呈す。

SK007（第５図）調査区の南東端に位置する。東側が調査区外に延び全容は不明である。現状で長径162㎝、短径141㎝、深さ17㎝を測り断面は浅皿状を呈す。12世紀後半から13世紀か。出土遺物（第６図010～019）。010は龍泉窯系青磁碗Ⅰ類である。胎土は灰色で釉は灰オリーブ色を呈す。畳付きの一部にまで釉がかかり、掻き落としは行っていない。内面に片切彫りの劃花文を施す。011は白磁碗Ⅳ類の底部か。底径6.8㎝を測る。胎土は灰白色で空洞が多い。外面調整は成型時の回転ヘラ削りのままで、釉は薄く半透明でわずかに貫入がはいる。012は白磁碗Ⅴ類口縁である。胎土は白色で、空洞が多い。釉は半透明。013は白磁皿底部である。胎土は灰白色で細かく、整形のケズリも丁寧である。釉は半透明で薄い。014は須恵質鉢口縁である。褐灰色で２㎜程の砂を少量含む。015は陶器耳壺であ



第５図　土坑実測図（1/30）



第６図　土坑出土遺物実測図（1/３）

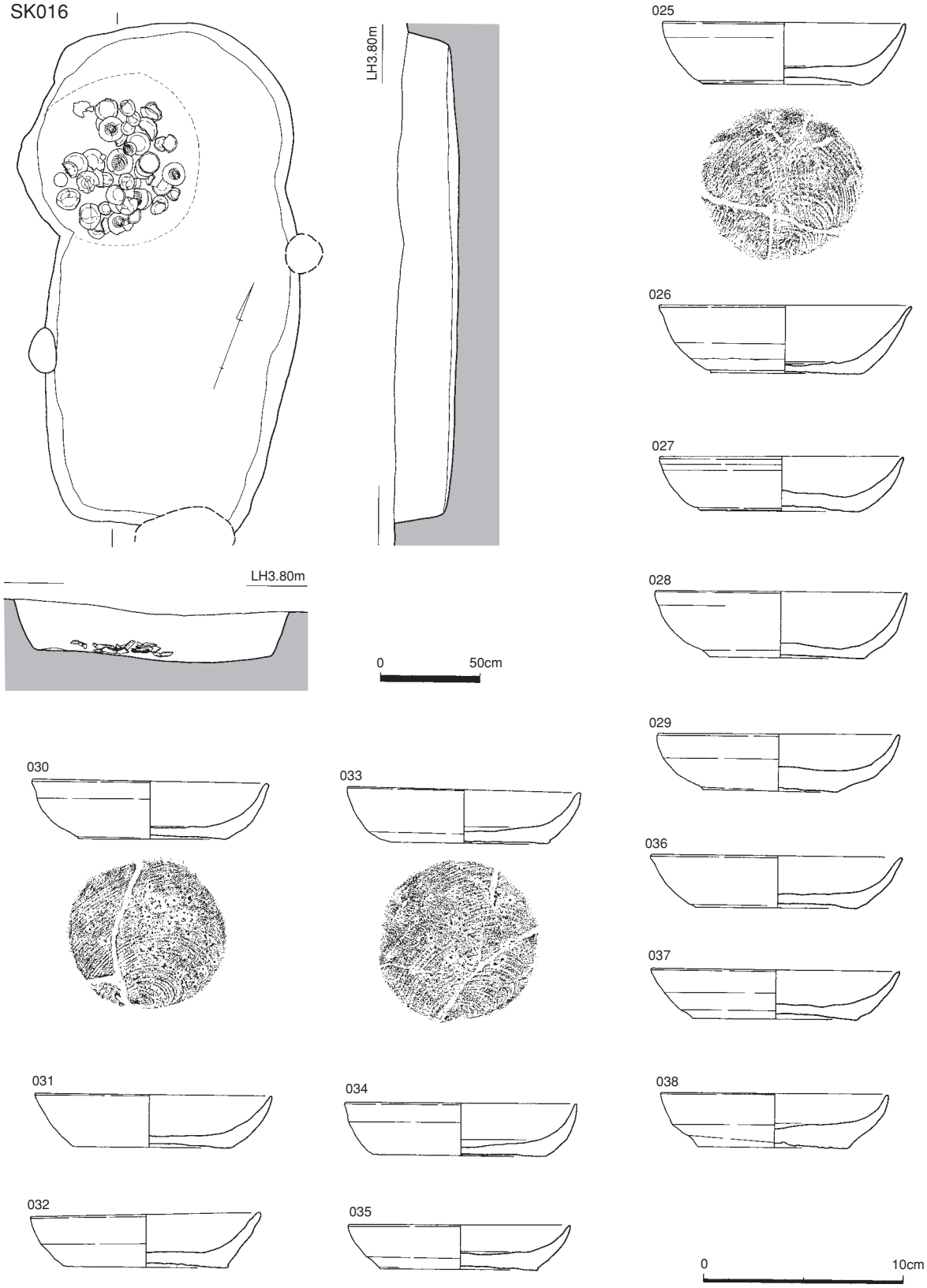
る。釉は薄く口縁部は茶褐色、他はオリーブ褐色を呈す。胎土はやや赤味をおびた灰色で精緻である。016は瓦器皿である。黒褐色を呈し胎土は灰色で砂を含まない。調整は外面坏部はナデ、底部は押出しのまま未調整。内面はナデ後、ミガキを施す。017は瓦器碗である。内外面とも黒灰色、胎土は灰白色を呈し粘土は細かく砂を含まない。内面と外面口縁部はナデ後ミガキを施すが、外面下半部は底部押出し整形のままで未調整。口縁下で屈曲する。018は土師器高台付き盤である。暗灰黄褐色を呈す。胎土は茶褐色で細砂を多く含む。雲母片を少量含み、焼成はやや不良で軟質である。外底面端部は急に立ち上がり鋭い稜線をなす。019は土師皿である。復元口径9.7㎝、器高1.4㎝を測る。灰白色

を呈し胎土に砂はほとんど含まない。内底部中央に静止指ナデを施し、外底部に板状圧痕あり。
SK009（第５図）調査区中央に位置する。SK003とSD010に切られ、全容は不明である。覆土は黒褐色を呈し、上層は黄色粘土ブロックを含む。下層は黄色シルトのブロックをわずかに含む。12世紀代か。出土遺物（第６図　020～024）。020は青磁輪花皿である。胎土は灰色で緻密。釉は灰オリーブ色を呈す。021は土師器椀である。灰褐色を呈す。口縁はややいびつで楕円を呈し長径で16.8㎝、器高6.3㎝を測る。胎土は１～３㎜の白色砂を多量に含む。内面は摩耗のため調整不明。外面は上半は回転ナデ、下半は回転ヘラケズリを施す。022は瓦器椀である。黒褐色で復元口径14.8㎝を測る。胎土は灰色で砂粒をわずかに含む。内面は丁寧なナデ後にミガキ、外面は一部ナデで口縁端の一部にミガキを施す。023は土師器盤である。復元口径15.6㎝、器高２㎝を測る。器表面は灰褐色、胎土はにぶい橙褐色を呈し１㎜以下の砂を少量含む。全体に雲母片を含む。024は陶器甕の口縁部である。釉は外面が茶褐色、内面は灰色を呈す。胎土は灰色の須恵質で砂粒を少量含む。
SK014（第５図）調査区の西側に位置する。北端をSD010に切られる。西側が調査区外に延びており、全容は不明であるが現状で南北234㎝、深さ20㎝を測る。覆土は暗茶褐色土で黄色粘土ブロックを多く含んでいる。覆土中から須恵器大甕片が出土した。
SK016・017（第７図）調査区の南西端に位置する。形状から２つの遺構の切り合いの可能性があるため何度か精査を行ったが、平面・ベルト断面のいずれでも切合いは確認できなかった。また、底面のレベルが同じであることからも同じ遺構である可能性が高いと考えられる。遺物は一応分けて報告するが北側の円形部が016、南側を017とした。遺構は南北に長い長方形で、長径250㎝、短径126㎝、深さ25㎝を測る。断面は浅皿状を呈す。覆土は暗褐色土で地山である黄色粘質土ブロックを多量にまんべんなく含む。掘削後すぐに埋め戻したと思われる。北側の丸くふくらんだ部分では遺構検出時に径86㎝程の環を確認した（点線部分）。環は途切れ途切れで厚いところでも厚さ５㎜程と薄く、埋土は灰褐色土である。井戸枠と思い円の中を掘り下げたところ、径10.6㎝の青銅製の和鏡と土師皿18枚以上・土師坏25枚以上が出土した。土師皿と坏は焼成が軟質で押しつぶされて細かく割れていたため、復元できなかったものが多い。円の中の覆土は周囲と同じである。土師皿や坏は裏表入れ混じった乱雑に投げ込んだ状態で、和鏡は背面を上にして出土した。鏡面には布が付着しており、その布の下には薄い板状の木片の痕跡が残っていた。14世紀後半から15世紀前半か。出土遺物（第７・８図025～059）。025～038は土師坏である。025は口径12.1㎝、器高3.1㎝を測る。全体が浅黄橙色を呈し、胎土は細かく砂をわずかに含む。底部は板状圧痕あり。026はややいびつで口径長径が13.0㎝、器高3.5㎝を測る。浅黄橙色を呈し、胎土精良で砂をわずかに含む。底部は円形であるが坏部がゆがんでおり、平面形は楕円である。内底部中央に静止ナデを施す。027は浅黄橙色で口径12.2㎝、器高2.7㎝を測る。内底部に静止ナデを施す。028は口径12.5㎝、器高3.5㎝を測る。外面にぶい橙色、内面灰褐色を呈し胎土はやや雑で細かな砂の他に１㎜程の砂を少量含む。雲母片わずかに含む。内底部と外底部は摩滅がひどく、調整不明。029は復元口径12.1㎝、器高2.85㎝を測る。内外面とも浅黄橙色で一部黒色を呈し、胎土は細かな空洞がはいる。雲母片を少量含む。内底部中央に静止ナデを施す。030は口径11.7㎝、器高2.9㎝を測る。浅黄橙色を呈し胎土は緻密で砂もほとんど含まない。内底部の調整は不明瞭。031は復元口径11.8㎝、器高2.6㎝を測る。浅黄橙色を呈す。全体に摩滅している。032は口径11.4㎝、器高2.9㎝を測る。赤橙色を呈し胎土は細かいが細砂を含む。調整は摩滅のため不明。033は口径11.8㎝、器高2.6㎝を測る。浅黄橙色を呈し胎土は精良、砂を少量含む。内底部中央に静止ナデを施す。034は口径11.5㎝、器高2.7㎝を測る。灰黄色を呈し胎土に細砂を多量に含む。内底部に静止ナデを施す。035は復元口径11㎝、器高2.4㎝を測る。浅黄橙色を呈し胎土は細かいが空洞が多くはい

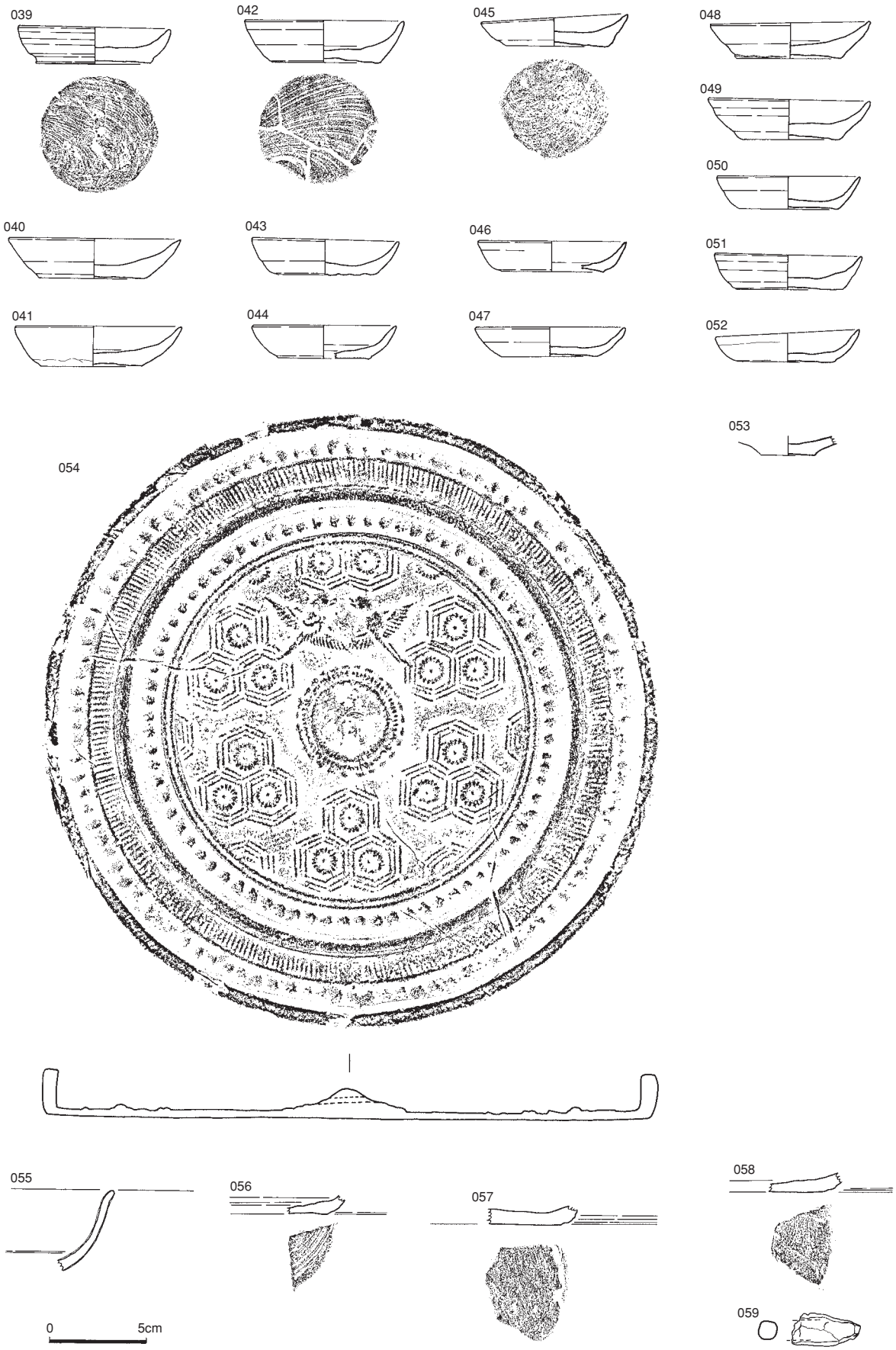
る。036は復元口径12.6㎝、器高2.7㎝を測る。鈍い黄褐色を呈し、胎土はこまかいものの空洞が多くみられる。全体に雲母片を含む。調整は不明瞭。037は口径12.4㎝、器高2.4㎝を測る。黄橙色を呈し胎土は精良で砂を少量含む。調整は不明。038は口径11.2㎝、器高2.7㎝を測る。浅黄橙色を呈し胎土は粗く砂を多量に含む。微小雲母片多い。039～052は土師皿である。039は口径7.9㎝、器高1.9㎝を測る。外面暗褐色、内面暗橙色を呈し胎土は粗く細かな砂を多量に含む。040は復元口径8.9㎝、器高2.1㎝を測る。にぶい橙褐色を呈し胎土は細かく微小な砂粒を多く含む。041は口径8.6㎝、器高2.3㎝を測る。浅橙色を呈し胎土は精良で砂等をほとんど含まない。整形は雑で全体がいびつである。042は復元口径8.2㎝、器高2.2㎝を測る。胎土はにぶい褐色で胎土は細かく細かな砂を少量含む。整形はやや雑である。043は復元口径7.6㎝、器高2.1㎝を測る。淡黄褐色で一部黒褐色を呈す。胎土はやや粗く細かな白色砂を多く含む。044は復元口径7.5㎝、器高1.8㎝を測る。にぶい黄褐色を呈し胎土細かく砂をわずかに含む。雲母片を含む。045は口径7.7㎝、器高2.1㎝を測る。にぶい橙色を呈し胎土はやや雑で砂を多く含む。全体に微小な雲母片を含む。底部糸切り。046は口径7.6㎝、器高1.7㎝を測る。灰黄色を呈し胎土細かく砂をほとんど含まない。047は復元口径7.8㎝、器高1.6㎝を測る。浅黄橙色を呈し胎土は空洞が多く細かな砂を多く含む。048は口径8.3㎝、器高1.9㎝を測る。浅黄橙色を呈し胎土は細かい。整形はやや雑。049は口径8.4㎝、器高2.1㎝を測る。にぶい黄橙色を呈し、胎土細かく砂を多く含む。整形雑で平面形は楕円形を呈す。050は復元口径7.4㎝、器高1.75㎝を測る。灰黄褐色を呈し、胎土細かく砂をほとんど含まない。微小な雲母片を含む。051は口径8.5㎝、器高1.9㎝を測る。黒褐色を呈し、胎土は粗く細かな砂を多量に含む。細かな雲母片を少量含む。整形やや雑で底部安定しない。052は口径7.4㎝、器高1.9㎝を測る。灰黄褐色を呈し、胎土はやや粗く空洞が多くみられる。口縁の高低差が大きい。内底部は静止ナデを施す。053は白磁皿底部である。054は青銅製の鏡で直径10.8㎝を測り、縁は直角式の中縁である。文様は擬漢式鏡で外区は内区側より縁に向かって細線による二重線帯、鋸歯文、中線帯、竪線文帯、鋸歯文帯からなる。内区には菊花を伴う三盛亀甲文を配す。６つの三盛亀甲の間には二重線に接して亀甲が一部分だけ顔を出すが、双雀の頭上の亀甲を挟む２つだけは亀甲ではなく菊花のみとなっている。鈕は花蕊座でその上側に双雀を配している。文様から鎌倉時代末から室町時代前半の鋳造と思われる。鏡面には布が付着する（布に関しては比佐・片田両氏の分析報告を記載）。調査時には布の下に薄い木板の痕跡を確認した。布にくるんで更に鏡箱等に入れて埋めたものである。055～059は017部分で出土した遺物である。055は龍泉窯系青磁碗である。釉はオリーブ灰色を呈し気泡含む。胎土は灰白色でガラス質である。056～058は土師坏である。056は明赤褐色を呈し、胎土は砂をほとんど含まないが雲母片を含む。057は細かな砂と雲母片を多量に含む。調整不明で底部は板状圧痕あり。058は外面暗茶褐色を呈し雲母片少量含む。059は鉄片である。断面隅丸方形で刀子の柄部分か。

（２）井戸

SE011（第９図）調査区の中央南側で検出した。SK002に切られている。平面形はほぼ円形を呈し、径150㎝を測る。上から50㎝は内傾して掘り下げでおり、径100㎝までは縮まる。その後は垂直に掘り下げ、遺構検出面からの掘り下げは139㎝を測る。覆土は上から50㎝は褐色土で細かな土器片を含む。下層は井戸枠の痕跡がみえ、外側は黒色の粘土、内側はしまりの緩いドベドベの黒色土で木片を多く含んでいる。検出面から93㎝で、曲物の井戸枠が出土した。曲物は高さ36㎝、径50㎝を測る。検出面から76㎝の所で木の皮製のタガと板材が出土した。曲物の上は円形桶側型井側である。12世紀前後と思われる。出土遺物（第９図060～078）。060～070は上層から、071～076は下層井筒内、077・078は



第７図　SK16・SK17遺構・遺物実測図（1/30・1/3）

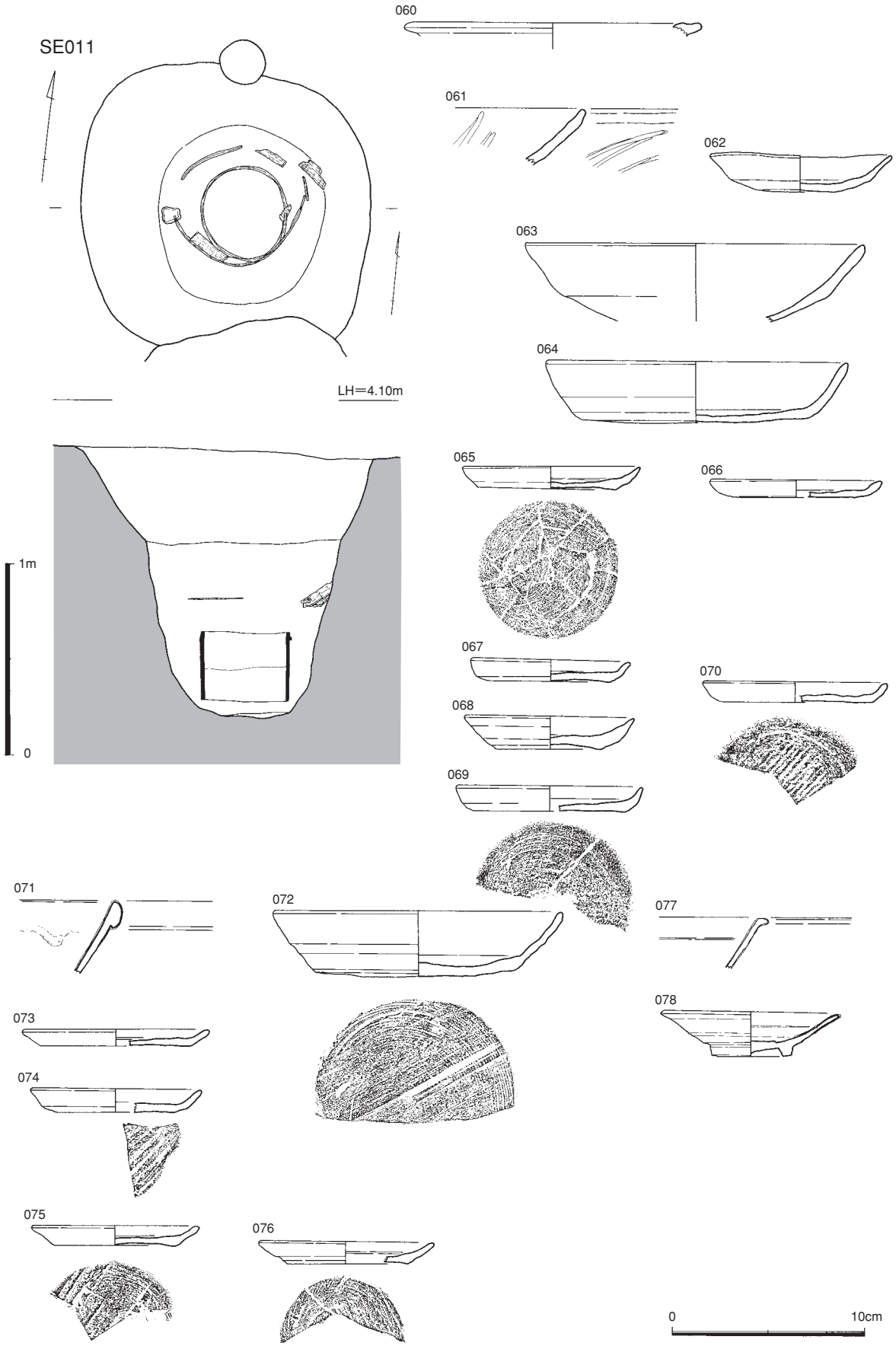


第８図　SK16・SK17遺物実測図（1/3、054は1/1）

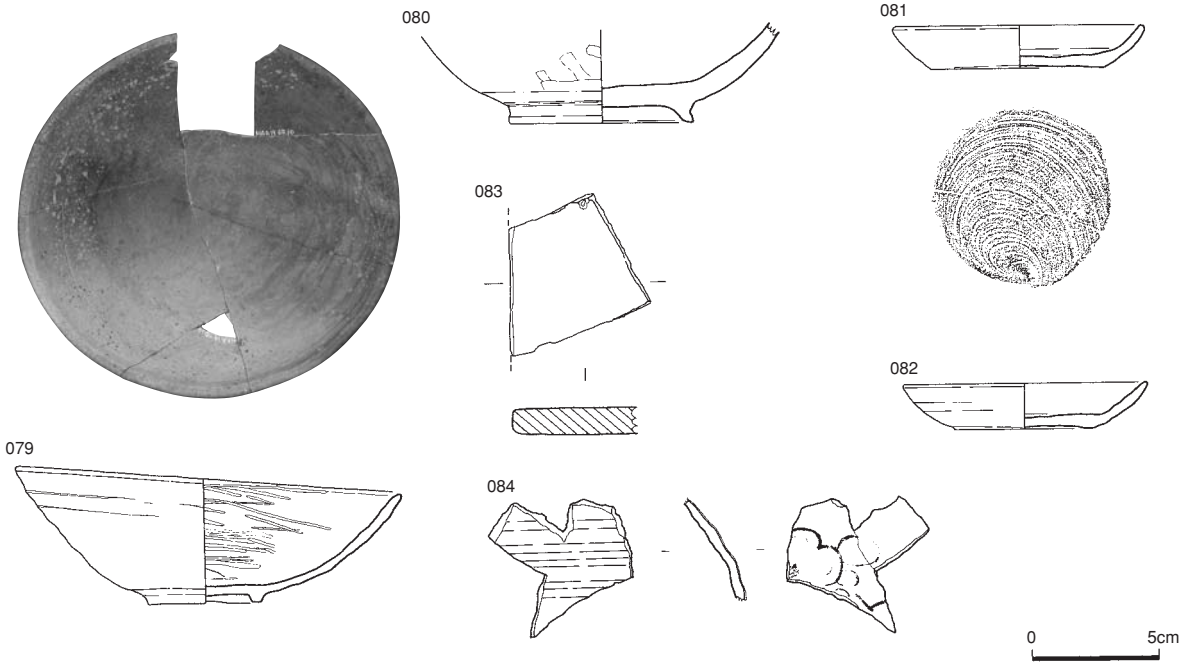
下層掘方から出土した。060は須恵質壺口縁である。復元口径15.3㎝を測り黒褐色から暗灰色を呈す。口縁上面に薄く釉がかかる。061は土師器椀である。外面淡橙白色、内面灰色を呈し、胎土は細かく砂を少量含む。内面は丁寧なナデの後一部斜め方向のミガキを施す。062は瓦器皿である。復元口径9.4㎝を測る。黒褐色を呈し内面は横方向のミガキ、外面底部はヘラ切り後押出している。063は瓦器椀で復元口径17.2㎝を測る。暗灰色を呈し胎土は灰白色で粒が細かく砂を含まない。摩滅のため不明瞭であるが横方向のミガキを施す。064は土師坏である。復元口径15.7㎝、器高3.15㎝を測る。浅橙白色を呈し、胎土は細かく雲母片を含む。内底部全面に静止ナデを施す。底部は板状圧痕あり。065～070は土師皿で065は口径9.2㎝、器高1.25㎝を測る。浅灰黄色を呈し胎土細かい。調整は摩滅のため不明瞭。底部は板状圧痕あり。066は復元口径8.9㎝、器高0.9㎝を測る。外面赤褐色を呈す。067は口径8.3㎝、器高1.1㎝を測る。暗褐色を呈し胎土は細かく砂をほとんど含まない。全体に微小な雲母片を含む。調整不明瞭。068は口径8.8㎝、器高1.8㎝を測る。浅橙色を呈し、胎土細かく雲母片わずかに含む。調整不明。069は復元口径9.6㎝、器高1.3㎝を測る。にぶい黄褐色を呈し胎土精良。内底部全体に静止ナデを施す。外底部は板状圧痕あり。070は復元口径9.5㎝、器高1.1㎝を測る。暗黄橙色を呈し、胎土は微小な砂を多く含む。調整不明で外底部には板状圧痕あり。071は白磁碗口縁である。胎土は灰白色。内面口縁下に釉ダレあり。072は土師坏である。復元口径14.8㎝、器高3.4㎝を測る。赤橙色を呈し、胎土に雲母片含む。内底部全面に静止ナデを施す。073～076は土師皿である。073は復元口径9.7㎝、器高0.9㎝を測る。浅黄橙色を呈し胎土には１ ㎜ほどの砂を少量含む。内底部全面に静止ナデ、外底部には板状圧痕あり。一部ナデを施す。074は復元口径8.9㎝、器高1.2㎝を測る。暗黄橙色を呈し胎土細かく微小の雲母片を含む。内底部全面に静止ナデ、外底部には板状圧痕あり。075は口径8.7㎝、器高1.1㎝を測る。浅橙色を呈し胎土は精良。内底部全面に静止ナデ、外底部は板状圧痕あり。076は口径9.1㎝、器高1.2㎝を測る。赤橙色を呈し胎土はやや粗い。内底部は口縁を除いて静止ナデを施す。外底部には板状圧痕あり。上からナデを施す。077は白磁碗口縁である。Ｖ－４ａ類か。内面口縁下１㎝に沈線。釉は半透明で細かな気泡を多量に含む。胎土灰白色。078は白磁台付皿である。釉は透明で灰オリーブ色を呈す。内底部を環状に掻き落とす。

（３）溝　調査区北側に３条検出した。SD010の北と南では遺構の分布密度が極端に異なるため、集落を区画する溝であると考えられる。

SD010（第４図）調査区の中央に位置し、東西方向に伸びる溝である。SK009を切る。断面は逆台形を呈し、幅67㎝、底幅14㎝、深さ39㎝を測る。溝の西端の覆土は上下２層に分かれており、上層は暗褐色土で黄色粘土ブロックを含む。下層は暗褐色土で白色砂と炭化物を少量散漫に含んでおり流水や滞水の痕跡はみられない。底面は東側が低くなっているが、東端部最下層は薄い粘土層で滞水していた可能性がある。12世紀代か。出土遺物（第10図079～084）。079は瓦器椀である。外面黒褐色を呈す。底部は内面からの押出しによって半球状を呈すが、整形が雑で凹凸がみられる。高台は幅約５㎜の粘土紐を貼り付けており、径は4.5㎝を測る。断面は逆台形に近い。いびつな底部に貼り付けたため高台も歪んでおり、正置すると口縁が傾き器の座りも安定しない。器高は最大で5.7㎝、口径は14.5～15.3㎝を測る。内面は全体をナデた後に円を描くようなミガキを施す。胎土は灰白色で１㎜ほどの砂をわずかに含む。080は土師器椀である。外面灰褐色を呈す。内面は全体にナデを施し、底部には一部ミガキが見られる。外面は一部ヘラによる強いナデかケズリのようなものがみられる。高台は貼付けである。胎土は精良で砂を含まない。焼成は良好で硬質である。底部の1/2弱が遺存。081・082は土師皿である。081は復元口径9.7㎝、器高1.7㎝を測る。淡橙色を呈し胎土精良で砂と雲母片を少量



第９図　SE11遺構・遺物実測図（1/30・1/3）



第10図　SD010 遺物実測図（1/３）

含む。焼成は良好である。082は淡橙白色を呈し復元口径9.6㎝、器高1.8㎝を測る。胎土は精良で砂を含まない。遺存は1/4のみである。083は砥石である。非常に粒が細かな砂岩で、厚さ1.1㎜を測る。084は壺の肩部である。外面は白色釉でその上から黒色釉で梅花文を描く。胎土は堅緻な須恵質で赤褐色を呈す。

SD012（第４図）調査区の北側に位置し、SD010に並行する。SD010との間は70～90㎝を測る。断面は浅皿状で上幅62㎝、底幅33㎝、深さ17㎝を測る。底面のレベルは東側が高い。覆土は褐色土で全体的に白色砂を含み、わずかに黄色粘土のブロックを含む。流水の痕跡はみられない。覆土中から瓦器椀片や黒色土器などの小片が出土した。

SD013（第４図）調査区の北端に位置し、東西方向に流れる。断面は浅皿状を呈し幅は最大で72㎝、底幅22㎝、深さ27㎝を測る。底面レベルは東側が高い。覆土中から土師坏小片とともに近世陶器の小片が出土した。

３　小結　本調査の結果では周辺調査で多く確認されている弥生時代と確定できる遺構はなかった。しかし、後世の遺構からは弥生土器片が出土しており、本来は周辺同様弥生時代の遺構も多く存在したと思われる。今回の調査で検出した遺構の多くは中世又は近世に属するものと思われるが、そのうち中世の遺構の時期は、周辺の調査では11世紀後半から12世紀と14世紀後半から15世紀の２時期の遺構が多く分布する。19次調査ではその多くが12世紀前後で確実に14世紀代となるのは鏡が出土したSK016ぐらいである。調査区中央部で検出した東西方向の溝は、その南北両側での遺構の密度が極端に異なることから区画溝と考えられるが、SD012・013は遺物が小片で時期確定ができない。また、SK016から出土した青銅鏡は布で包んで箱に入れた可能性があり、また最初に検出した径86㎝の円は曲物の痕跡の可能性が考えられ、鏡を幾重にも包んでいるなど埋め方が非常に丁寧であることや、その下から土師坏・皿がまとまって出土した状況などからは祭祀に関わる埋納と考えられる。今後の調査で周辺の中世集落の全容が解明されるのに期待したい。

4　原19次出土和鏡の保存科学的調査　（埋蔵文化財センター　比佐陽一郎・片多雅樹）

出土した和鏡には鏡面の広範囲に織物の付着が認められた他、保存処理過程での顕微鏡観察等により幾つかの興味深い知見が得られているので、その所見を記す。

まず織物については、鏡面のみの残存で、鏡の側面や鏡背面には見られなかった。出土当初は鏡面の広い範囲に付着が認められていたが、腐食によって埋土と同化したような状況の箇所は、保存処理におけるクリーニングの過程で脱落した部分もある。現状では、やや黄味を帯びた白色を呈し弾力を失ったような質感であるが、一般的に見られる付着繊維のように繊維本体が腐食によって失われ、金属の錆が染みこんで外殻のみが残存する状況とは明らかに異なっている。本来の繊維としての性状は失いながらも、繊維質そのものがある程度残存する状況が窺える。織りは平織りで、見える範囲では１種類のみ、縫い合わせなどの特異な部分も見られない。織り密度は経糸23×緯糸20本／１ ㎝を計る[1)]。織物を構成する糸はＳ字状に軽く撚りがかかっており、単繊維の太さなどの特徴と併せて麻の繊維と考えられる。１本の糸の太さはまちまちで、0.25㎜程の細いものから0.5㎜近い太いものまであるが、概ね0.3㎜前後である。単繊維は25～45ミクロンを計る[2)]。

更に細かく繊維の種類を見るために、脱落した小片を樹脂包埋～研磨し、クロスセクション観察に供した。表面的な観察ほど残存状況は良好ではなく繊維成分の脱落した空洞が観察されるが、その形状は細長い楕円形を基本とするもので、やはり麻の特徴を有している。しかし現状では麻の更なる分類、同定（大麻・亜麻・苧麻など）には至らない。

また実体顕微鏡観察では、やはり鏡面で、平織りの布の下層に織り目のない繊維が絡み合った組織が見られる部分がある。これは過去におこなった中世の鏡の調査経験から紙と推測される。

この他、鏡背面では、付着していた埋土の中の一部に、層状に赤色の顔料が広がる部分がある。この範囲はそれほど広いものではなく平面で数㎜、厚さも１㎜に満たない程度のものである。しかし観察ではある程度の粒子の凝集する様子が見られることから、漆器などの有機物が分解して顔料のみが残存した状況では無いと思われる。微小領域用蛍光Ｘ線分析装置による赤色部分の分析では、顕著な鉄のピークが得られており、いわゆるベンガラと見られる。どのような理由で顔料が存在するのかは今後の検討課題である。更に、その存在意義は不明ながら、やはり付着埋土中に籾殻と見られるものが数粒含まれていたことも付記しておく。

なお鏡は、表面的には安定しているものの所々鱗状に剥離し、内部がチョーキングを起こしている他、透過Ｘ線撮影でも外側からは見えない腐食範囲が認められたことから、アクリル樹脂による含浸強化が必要と判断された。しかし一方で樹脂含浸は今後の繊維観察に支障を来す要素となることもあり、方針は発掘調査担当者との協議により決定した。その結果、繊維に関してはこれまでに必要な情報は得ており、なおかつ剥落した破片も残されていることから、鏡本体の保存を優先し、全体的な樹脂含浸を行うこととし、これを実施した。

註

１）経緯の判別は困難であるが、古い織物では経糸の本数が緯糸のそれに比べて多いものが大部分を占めているという沢田むつ代氏の研究（沢田2005）を手がかりに判断した。

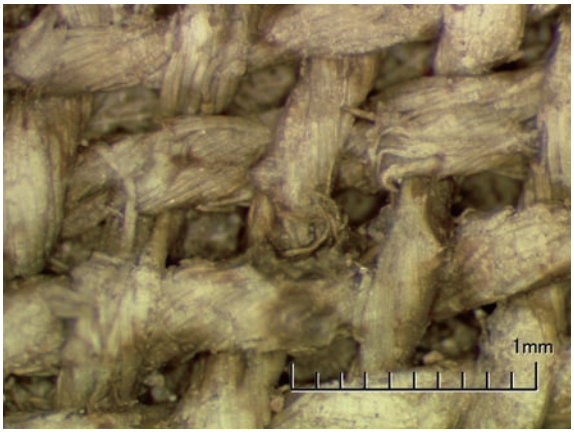
２）キーエンス社製ビデオマイクロスコープの計測機能を用いて測定。

参考文献

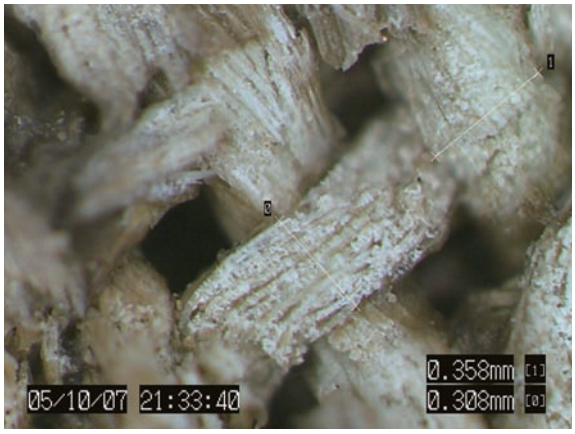
沢田むつ代2005「出土繊維の観察法」『季刊考古学』第91号　雄山閣

1．鏡面織物付着状況

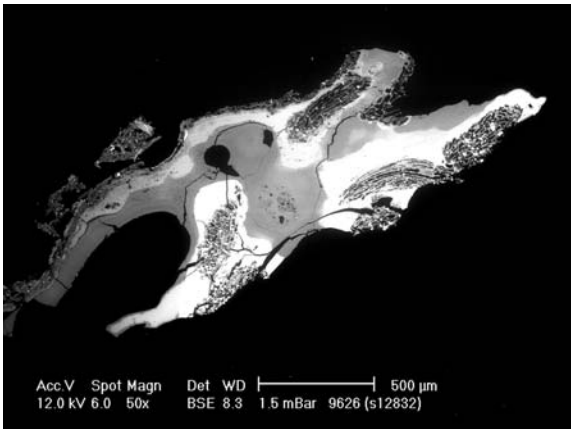
2．織物の実体顕微鏡写真（約10倍）



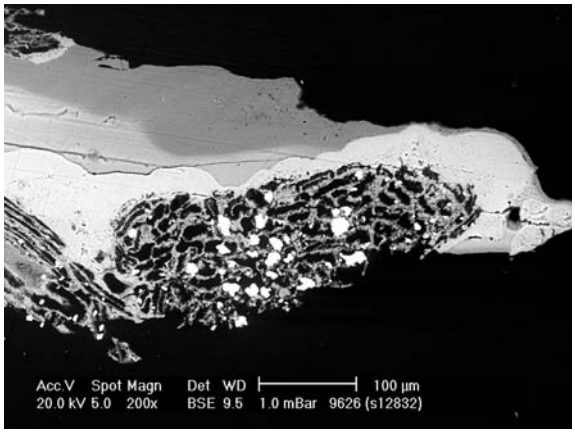
3．織物の実体顕微鏡写真（約40倍）



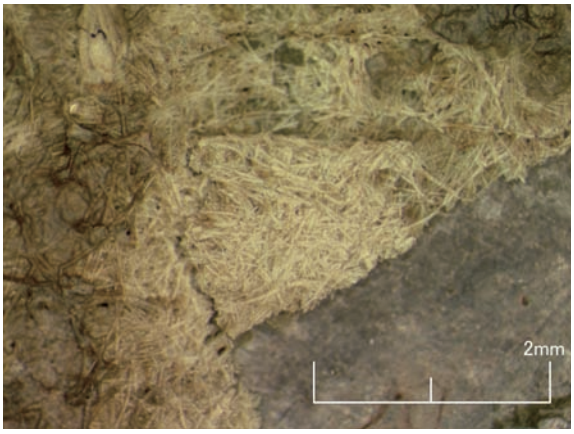
4．ビデオマイクロスコープによる糸の計測状況



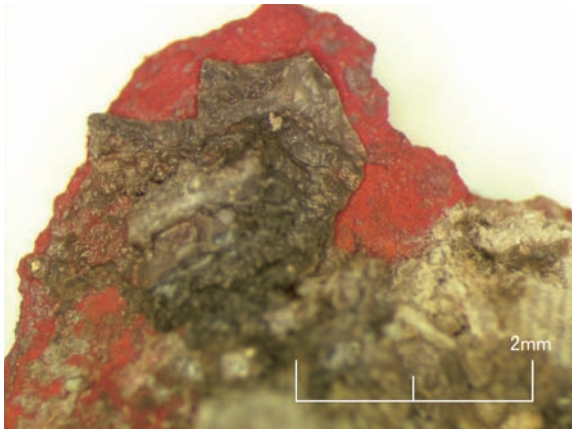
5．繊維断面のクロスセクション（約50倍）



6．繊維断面のクロスセクション（約200倍）



7．紙と見られる組織の実体顕微鏡写真（約20倍）



8．赤色顔料の実体顕微鏡写真（約20倍）

1．調査区全景（西から）

2．SK001（西から）

3．SK003（北から）

図版 2

1．SK004（東から）

2．SK005（北西から）

3．SK006（北から）

1．SK007（西から）

2．SE011（東から）

3．SE011井筒（南から）

1．SK016・017（南から）

2．鏡出土状況（南から）

3．鏡（X線写真）

書名　原遺跡12
副書名　原遺跡第19次調査報告
巻数　12
シリーズ名　福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号　917
編著者名　屋山　洋
編集機関　福岡市教育委員会　発行機関　福岡市教育委員会
発行年月日　２００６０３３１　作成法人ID　４０１３４
郵便番号　810－8621　電話番号　092－711－4667　住所　福岡市中央区天神１－８－１
遺跡名ふりがな　はら
遺跡名　原
所在地ふりがな　ふくおかしさわらくはら
所在地　福岡市早良区原
市町村コード　40130　遺跡番号　020311
北緯　33°33′43．9″　東経　130°20′45″
調査機関　福岡市教育委員会　調査面積　121㎡　調査原因　専用住宅建築
種別　集落
主な時代　古代末～中世
遺跡概要　弥生時代～古墳時代－柱穴状遺構－土器
古代末～中世－井戸＋土坑＋溝＋柱穴状遺構－土器＋貿易陶磁＋和鏡
近世－土坑＋溝＋柱穴状遺構
特記事項　時代の集落で土坑から土師坏や皿と共に和鏡が出土した。鏡は布でくるんで箱に入れて埋められたと思われ、何らかの祭祀による埋納と思われる。

原遺跡12

－原遺跡第19次調査の報告－
福岡市埋蔵文化財調査報告書　第917集

２００７年３月３０日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神１－８－１
☎092－711－4667

印　刷　富士印刷社
福岡市東区箱崎ふ頭６丁目６－45
☎092－641－5131